

# 森のなかでの読書

若林 悠平

信州イスラーム世界勉強会会員の若林と申します。  
今日は、私が最近読んでいる本のご紹介をしたいと思います。

タイトル『預言者』

著者 カリール・ジブラン Kahlil Gibran

訳 佐久間 彪（さくま たけし）

出版社 至光社、1990 年（ポケット版）

## 著者紹介

1883 年にレバノンで生まれたジブランは、12 歳の時に母親や兄妹たちと渡米。

アラビア語の高等教育を受けるため、15 歳の時に単身、レバノンに帰国。

15 歳の時に、「預言者 “The Prophet”」の草稿をアラビア語で書きます。

17 歳の時にボストンに戻り、画家・作家としてパリやニューヨークでも活躍しながら、“The Prophet”を英語に書き直します。何度も推敲を重ね、1923 年に英語で“The Prophet”を出版しました。

ジブランはマロン派キリスト教徒の家庭に育ちましたが、イスラームの神秘主義スーフィズムから思想的影響をつよく受け、特定の宗教が威張ることに反対し、世界の諸宗教が一体的に結びつく未来に関心 を払いました。

The Prophet は 100 を超える言語に訳されたそうですが、ジブランは 1931 年ニューヨークで肺結核と肝硬変のため亡く なりました。享年 48 才。レバノンの故郷ブシャッリ村に埋葬されました。

彼の正式の名前はジブラーン・ハリール・ジブラーン Jubrān Khalīl Jubrān ですが、米国では入国時に Kahlil Gibran と登録されたので、カリール・ジブランで通用することになったようです。アラビア語で「ハ」音を出す文字2種のうち、hでなく kh でローマ字転写される「ハ」は喉の奥をつよく擦るように出す「ハ」なので、聞き方によって「カ」とも聞こえるためとのこと。

Wikipedia では、ハリール・ジブラーン:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%B8%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%B3>

## 本のあらすじ

「預言者」は、アルムスタファという男性が、オルファレーズという 12 年間暮らした街を離れ

る時に、街の人々に問われる事に答えるという形で書かれています。

人々に問われる内容は、飲食について・労働について・家について・売り買いについて・罪と罰について・法律について・苦しみについて・快樂についてなど、人が生きる上で普遍的な事柄で、アルムスタファがそれらの問いに答える形で話は進みます。

### 私の感想など

今回は、私が読んで気に入ったところを紹介・引用し、自由気ままな感想を記させていただきます。文章を省略してご紹介する場合、省略箇所は「〜〜〜」としてあります。

アルムスタファが語り始める時に、見者の女性が請います。「預言者よ(アルムスタファのこと)、あなたは至高のものを探し求めながら、あなたの船を待っていつもかなたに目を注いでおられました。〜〜〜今、切にお願い致します。行かれるまえに、どうかお話しください。あなたの真理をお与えください (P.17,18)」と。

### P,27「施しについて」

金持ちの男が言った。お話しください。施しについて。

アルムスタファは答えた。あなたがたは、よく、「与えてもよい。しかし、それに値する者にだけ」と言います。でも、あなたがたの果樹園の樹々や牧場の家畜の群れはそうは言わないでしょう。かれらは生きるために与えます。なぜなら、彼らにとっては、保つことは亡びることと同じなのです。

〜〜〜 まことに、命に与えるのは生命自身。与えるのが自分だと思い込んでいるあなたがたは、その立会人でしかないのに。

### …若林…

木を切り、木を人の暮らしに役立てる林業が私の職業です。木を切り利用する上では次の世代の木を育て、山を作る視点がとても重要です。

育てる時には、木だけではなく山の生き物を観察し、育てる環境を把握することが大事です。山で生き物たちを観察していると、植物や動物、菌類の間で循環する命のつながりが見えます。

木が葉を生み、葉は動物や虫の餌になり、食べられた葉は排泄され分解されて、根から吸収され木に戻る。

木の葉は山の養分となりますが、一部は川を流れや

がて、海の生き物の養分にもなります。「保つことは亡びることと同じ」は、山で循環する命の



ことと重なります。

木と土の関係。植物と人の関係もそうだと思います。この節の最後にアルムスタファは、「そして、施しを受ける人たちよ。およそ、ひとは皆、受けるもの。重んじ過ぎてはならない。感謝することを。自分にも施すひとにも軛(くびき)を負わせないように。」と語ります。

人は植物や動物を食べ生きています。生きることは循環する命の一部であるということ。自分自身もまた次に渡していく存在だと思うと、自分への思いやりと他者への感謝が自然とできる気がします。

命をいただく事に感謝し、けれども重んじ過ぎず、日々を暮らしたいと思います。

### P.69「苦しみについて」

するとひとりの女が言った。お話しください。苦しみについて。

アルムスタファは答えて言った。苦しみ、それは、あなたの理解を覆っている殻が壊れること。果実の芯が陽(ひ)に触れるためには、先ずその核が壊れねばならないように、あなたも苦しみを知らなければなりません。

〜〜〜苦しみの多くは自ら選んだもの。それは、あなたがた自身のなかの、うちなる薬師(くすし)が、病んでいる自分を癒そうとして盛った苦(にが)い苦しい一服。

それゆえにこの薬師を信じなさい。そしてその薬を沈黙と静穏のうちに飲みほしなさい。

### …若林…

私は、この節を読んで、今までに経験してきたケガや病気のことを思い浮かべました。

例えば、過去に私は人生の転機となるような、死の直前までいったケガを経験したことがあります。山での作業中の事故でした。

作業中に木の梢(こずえ)を見る必要があり、見上げた途端、木の枝が落ちてきて目に刺さり、眼窩(がんか)に骨折が起きるとい激しい事故でした。

事故自体はちょっと防ぎようの無い、不慮の事故という感じでした。けれど、そのケガをした事故の原因や要因となったことは自分にあると感じてきました。その時その場で、絶妙のタイミングで見上げることがなければ私は怪我をしなかったでしょう。

「うちなる薬師」という表現に出会ったことで、これまで感じていたことがより具体的になりました。その頃は、仕事や自分の欲に振り回されていて、自分としては一生懸命やっているのだけれど、実は暴走に近い状態だったのだと思います。その怪我をしたために全てを一旦やめざるを得ない状況となりました。

暴走状態の私を止めるには家族や友人など脇からの忠告では無理だったと思います。



その時の私に必要だった「止める事」ができたのは「うちなる薬師」しか無かったと思います。止まって見つめ直すことができたので、人生は好転したと思いますし、今では怪我に感謝しています。

私はケガを治す際の入院や治療を通して、家族、友人、病院関係者、会社関係者と様々な方にお世話になりました。そのことは感謝の気持ちを持つことにつながっています。周りに感謝の気持ちを持つことも私の「うちなる薬師」が事故を通して気づかせてくれたと感じています。ありがとう薬師。ありがとう自分。

### P.71 「自らを知ることについて」

そこでひとりの男が言った。お話しください。「自らを知る」ことについて。

アルムスタファは答えて言った。あなたの心はひそかに知っているのです。日々夜々の秘密を。しかしあなたの耳は聞きたがっています。あなたの心の「知」の声を。自分の魂がすでに知っているものを、あなたは言葉で知りたいと思う。

～～～ あなたの「知」の深みを、測り竿や測り綱で探ってはなりません。なぜなら、「自ら」は極みなく果てしない海だからです。

・・・若林・・・

私の中には薬師がいることを知りました。『預言者』を読むことの喜びは、自らを知ることにつながっているからだと感じます。この節では、自分の中に全てがあるということを行っていると思うのですが、それは最近意識していたことでした。信州イスラーム世界勉強会で知ることや学ぶこと、外の世界を知ること、私にとって自分を探求することにつながっていて、楽しさや喜びがいっぱいです。

### P.73 「教えることについて」

するとひとりの教師が言った。お話しください、「教えること」について。

アルムスタファは言った。あなたに誰かが何かを示しても、それは所詮(しょせん)、すでにあなた自身の「知」の夜明けに、目覚めを待ってまどろんでいたもの。

～～～もしかれが誠(まこと)の賢者ならば、あなたがたをかれの英知の住み家には招き入れず、あなたがた自身の精神の門口にこそ導きます。

～～～音楽家は、宇宙にみなぎるリズムをあなたに歌って聞かせましょう。しかし、リズムをとらえる自分の耳と、リズムをこだまさせる自分の声とをあなたにはあたえられません。

～～～ひとりのひとの透察(ヴィジョン)というものは、その翼を他の人に貸したりはできないのです。

…若林…

知ることって、そういう事か！と思い、「目から鱗(うろこ)」の一節でした。

外からの刺激に対して自分の中の要素が反応して、受け入れる「知」となっていると感ぜま  
す。

山で働く、山で遊ぶ、家族と過ごす、友人と遊ぶなど、他者との関わりの中で自分以外のこと  
を知ると、自分のこともよく分かります。

また、信州イスラーム世界勉強会ですが、勉強会を通じて知ること、それは世界を知ること、  
日本を知ること、また 自らを知ることに関がっています。

「自らを知ること」は「内向き」のようですが、より世界に開いていくという風に感じていて、その  
ことは循環する「自分の中の自然」とも言えます。

また、「自らを知ること」と「教えること」の関係が面白いと思いました。「知ること」を理解し「教  
えること」につなぐ事ができるようになりそうです。

## P.80 「時について」

そこでひとりの天文学者が言った。先生、「時」については何と言われますか。

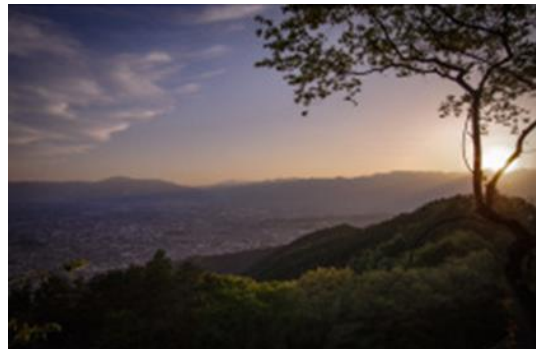
アルムスタファは答えた。〜〜あなたのうちなる「時無きもの」は生命の「時の無さ」を感じ  
とり、昨日は今日の記憶、明日は今日の夢、と知 っているのです。

あなたのうちで歌い瞑想しているものは、未だにあの太古の最初の瞬間の領域にとどまっ  
ているのです。宇宙に星を撒(ま)き散らした、あの瞬間のうちに。

…若林…

「最初の瞬間」は、宇宙に星を撒き散らしたビッグバン。その瞬間に、誰もがつながっている、  
誰もが知っている、という見方に共感しました。人類の共通項。人類みな兄弟。私のうちの「時  
無きもの」「歌い瞑想しているもの」が「霊」といわれる存在ではないかと思ひます。私の中で  
納得できる霊的感覚は、今回この感想を書いているという事実、物事に感謝する気持ちや他  
者との繋がりの実感。それらの事が私の行動の原動力につながって いるという感覚です。  
山の作業のしきたりでは、一年の仕事始め、そして山の現場の仕事始め、木の切り始めの都  
度、「山の神」にお参りをします。作法は、二礼二拍手一礼です。

私は、木だけでなく山の生き物全てに感謝する  
気持ちと同等の気持ちで、自分にも感謝の気持  
ちを持ち祈るようにしています。



## P.83 「善と悪について」

すると、町の長老のひとりが言った。お話しくだ

さい。「善と悪」について。

アルムスタファは答えた。私が語れるのは、あなたのなかにある「善」についてであって、「悪」についてではありません。なぜなら、悪とは飢えや渇きに苦しんでいる善そのもの。それ以外のなんでしょう。まことに善は、飢えればたとえ暗い洞穴のなかへでも食物を探しに行き、渴けば腐った水でも飲んでしまう。

…若林…

山のなかの木々を見ていると、自分のことを最優先に生きているように見えます。光を求めてどこまでも枝を伸ばし、葉を広げ、陰になる他の木や草の事などお構いなしです。しかし、伸ばしすぎた枝のせいで風を強く受け折れたり、ひどい時は根元から倒れたりしてしまいます。木が枝を自分勝手に伸ばす姿は「飢えや渇きに苦しんでいる善そのもの」。しかし、枝の下が日陰になれば日陰で生きる植物が生息できるようになりますし、折れたり倒れたりした木は分解する事が糧になっている、昆虫、微生物、菌類には歓迎されることになります。自分勝手に他者にとって善いことになっている。自然界の循環のなかでは、善も悪もないと思います。ただ、生きるという事が他の為になっている、他の為にしかなくない、その事は「善 100%」なのだとおもいます。

人生も「ゼンヒヤクパー！」

物語の中でアルムスタファと、オルファレーズの人々との別れの時がきます。別れのセリフの中で彼が語った言葉が印象的なので、ご紹介します。

#### P. 105 別れ

～～～そこで、見者アルミトラは言った。この日、この所、そして語ってくださったあなたの精神が、祝されますように。

アルムスタファは答えた。語ったのは果たして、私だったのでしょうか。私もまた聞き手ではなかったのでしょうか。～～～私はただ、あなたがたが自分の考えのなかですでに知っていることを言葉にして語っただけ。しかし言葉になった知識は、言葉なき知識の影でしかありません。

(P.111)

…若林…

アルムスタファは聞き手。アルムスタファが語った言葉は預かった言葉。語ったことは、言葉なき知識の一部分。

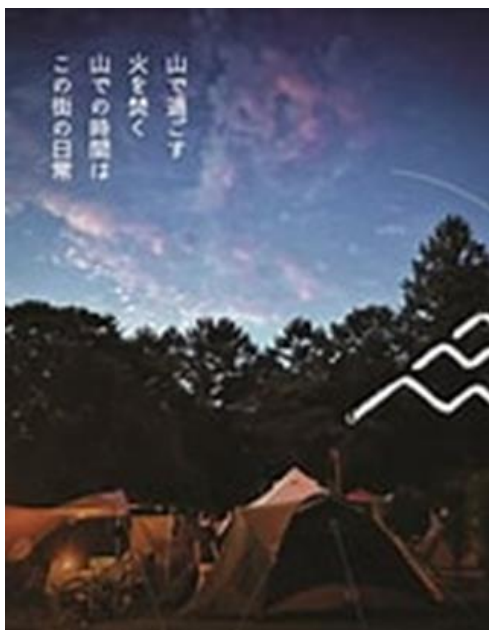
私の趣味は、自転車に乗ること、犬の散歩、畑での野菜作り、庭木の剪定、機械修理、勉強会の参加、人のお世話、と色々あります。そんな色々を通じ、世界の声や自分の声を聞くことができると感じます。

ハリール・ジブラーンの『預言者』を読んだおかげで、知ることの喜びを再認識し、今後もより

豊かに「知」を追求できる力があたえられたと感じています。

『預言者』には、まだまだ紹介しきれない沢山の面白い語りが出てきます。興味を湧いた方は、ぜひとも読んでみてください。

## おわり



松本市美鈴湖もりの国オートキャンプ場  
ホームページより